

# FUZOKU TIMES

## 卒業お祝い号

2004年3月 新聞部発行

「公」と「私」について思う  
校長 武蔵野 實先生  
副校長 斉藤 正治先生

思えば、私たちの世代は「個の尊重」を云いながら、限りなく「私」を優先させることを教育されてきたようだ。教育する側が「個」と「私」の区別がついていなかったのではあるうか。「個の尊重」とは、自分自身は存在としての「個」であるが、相手も厳に存在する「個」であることを認める立場である。しかし、「私の優先」は、自分自身は個別存在であるが、他者はひと括りの「外部」であり、そこには相互性、相対性がない。そのことが今日あらゆる方面で社会的問題・秩序の混乱を生じさせている。

「個」と「個」の意見が異なることが起こり得る。それでも「個の尊重」から云えば、互敬の精神で相互理解を図り解決の糸口を見つける努力がなされる。やがて、すべ

ての「個」が準拠しなければならぬ立場(それを「公」と云う)が社会的に醸成確立されていく。したがって、「公」の権威は多数の「個」に支えられているといえる。そのことは「公」を担って社会にはたらきかける立場の権威の大きさを示すとともに責任の重大性を示している。今現在、残念ながら、平均的には「個」にも「公」にもそのような意識は希薄である。それは、ともに「私」の優先の中で生きていくからである。そのような社会(本校も含む)にみなさんを投げ入れざるを得ない自身を恥かしく思う。卒業を機に一言お詫びを申し上げたい。

今さら気がついて遅いのかも知れないが、みなさんが担うこれからの二十一世紀はそのことを克服したものであってほしいと切に願う。

十五歳から十八歳に  
教務部部长

橋本 雅文先生

皆さんは、今から三年前、まだ表情やしぐさに、あどけなさの残る十五歳の子どもとして本校に入学してきました。そして三年間の学業を終えて、今では言動の端々に大人の雰囲気を感じさせる十八歳の青年になって、まさしく「見違えるようになって」本校を巣立っていかうとしています。

「八時四十分より九時三十分のほうに、賢くなっている。そんなつもりで授業を受ける。皆さんには、そんなことを言い続けてきました。夕方の方が朝の自分よりは賢くなっている。今日は昨日より賢くなっている。・・・そして今、三年前よりは格段に賢くなっている。そんな皆さんに「お疲れさま」の言葉と未来に向けての熱いエールを送ります。

生徒指導部長

高屋 定房先生

先日、ある生徒がスピーチの中で、不安があるから生も生き生きしてくる、辛さがあるから幸せが輝いてくる、といった内容のことを言いました。たくましいな、と思います。たのもしいな、と思います。余分なことですが、辛さに何かが一っ加われれば幸になるんですね。みなさんに幸多かれ。

卒業生に

附属高校の心象風景

研究部部长

井上 達朗先生

卒業おめでとう。ところで、先日本校が開催した研究会で、本校の一期生に講演いただいた。その折りに、彼は私と同期生だが、懐かしそうに

「校舎が変わっていない」としきりに言い、高校時代のことや実習に教育実習に来たときのことを話してくれた。私にとっては日常的に見える古びた校舎も、彼にとっては三十数年前に時間を飛び越えさせるものなのです。十代後半を過ごした場として、あなた方一人ひとりに、鮮明な記憶を蘇らせる縁<sup>えんじ</sup>として高校があればと思います。心から皆さんの活躍を祈ります。

自立と自律

三年一組担任

高田 法彦先生

三年二組担任

杉本 浩子先生

卒業おめでとう。

三年間を振り返って、みんなはどのような感想を述べるのでしょうか。楽しかった、辛かった等いろいろあるでしょうが、この三年間の経験がそれぞれの人生に大きな影響を与えることでしょう。そして、これからの経験がさらにみんなを大きく成長させることでしょう。失敗をおそれず、いろんなことにチャレンジしてください。活躍を期待しています。

卒業生の皆さんへ

三年三組担任

境 倫代先生

卒業おめでとう。三年間を皆さんと過ごして、今とても満足しています。担任としてつくづく思うのは、三年とうい月日の間に、人は変わるも

のだなあということ。一言で言ううと大人になりましたね。無邪気な笑顔から知的な微笑に変わった人がいます。逆に、いつ話しかけても硬い表情だった人からステキな笑顔が返ってくなったケースもあります。心そのままに振舞っていた人から、やさしい思いやりのある言葉がきかれるようになりました。もっともっと成長してください。そのためには自分の個性を大切にすると同じく、らい他者の話に耳を傾けることを大切にしてください。

三十七期生の卒業に際して

三年四組担任

上岡 真志先生

「もつと遠くへ、もつと高く。」  
自分を見つめ、夢や理想に向かって、真正面から挑み続けること。

道程を楽しみ、その中の

発見や成長を喜べること。

孤独や絶望を知り、やさしさと笑顔を忘れぬこと。

生きている限りそうありたいと思っています。

卒業する皆さんはこれからの旅路を大いに楽しみ、大いに暴れてください。

まだまだ後ろを振り返る必要はありません。そしてまたいつの日か。

「小言」

三年五組担任

中井 光先生

「がんばれ」とか「前向きに生きろ」という言葉をかけることが憚られる妙な時代になってきたと思います。しかるべき事情があるならいざ知らず、自分に言い訳をして、あるいは周囲がその言い訳まで理解してあげなければならぬご時世には辟易します。

卒業生のみなさん、だから

私は敢えて言います。がんばれ！前向きに生きろ！夢をあきらめるな！「だってだって」と言つな！小理屈ばかり上手な「大人」になるな！とことん戦え！  
そして卒業おめでとう。

### 編集後記

三年生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。このたびのご卒業、我々新聞部を含め、在校生一同、心よりお祝い申し上げます。

通例、部活動などに身をおかねば先輩および後輩と関わる機会はそうないことでしょう。今年度新聞部は全員二年生というところで、遺憾ながらみなさんと接することは、指折りほとんどなかったかもしれません。

しかし、登下校時や校内でみなさんの姿を見かけることは、そうではありませんでした。同じ電車で「あ、

三年生だ」、ロッカー室で「あ、三年生だ」、一階で二階で三階でこんなにちは。風格とでも申しましようか、男の方も女の方も、ある種の気品を備えてらっしやるように思えて、多かれ少なかれ、誰しもが憧れを抱いていたのではないかと思います。

そんなみなさんのご卒業、今どんな思いでいらっしやるでしょうか。

『春、四月。満開の桜に迎えられ、真新しい制服に身を包み、楽しかった運動会、思い出に残った文化祭、そして、今日この日、僕たち私たちは、今巣立ちます。』

小学校の卒業式で、卒業生一同、言葉のリレーをしました。新たなステップに胸を躍らせ声を張り上げる者、名残惜しさに感涙に咽ぶ者、卒業生が二百人いれば、二百通りの思いが交錯するのです。

そして、アンカーがゴールテープを切った後、在校生はこう言うのです。

『卒業生のみなさん、ご卒業おめでとうございます。私たちはみなさんの後を継ぎ、この学校の伝統を守ってゆきます。そして、みなさんのように、誇り高く卒業してゆけるよう、精進します。』  
だから、私たちも。ね。

卒業しても、変わりませんよ。友達、恋人、約束……、決して後戻りの許されない人生の一本道。だからこそ、大事にして欲しいと思います。  
本当に、ご卒業、おめでとうございます！！